

東南アジアのイスラーム化に関する諸文献・史料

文学研究科歴史学専攻博士前期課程一年

瀧井直子

はじめに

筆者は、卒業論文において「インドネシア・マレー世界」のイスラーム化と題し、東南アジアへのイスラームの伝播と普及に関する考察を行った。今永清二氏によると、インドネシアにおけるイスラーム化は「きわめて平和的に、長い時間をかけて、漸進的に」¹⁾行われたことが明らかにされている。さらに、現地の支配者層のイスラームへの改宗が民衆のイスラーム化と密接に関係していることが窺われた。このようなイスラーム化に関して、スーフイズム(イスラーム神秘主義)が大きな役割を果たしていることが指摘されている。²⁾ 管見の限りではあるが、これらの特徴はインドネシアだけでなくマレー半島でも見られる。

本稿は、サムドラ・パサイ王国、パタニ王国、マラッカ王国の王國年代記を手がかりに、それぞれの王国がイスラーム化した経緯とスーフイズムとの関係を挙げ、今後の研究課題を明らかにしようとするものである。

一、東南アジアとイスラーム

東南アジア地域へのアラブ人の来航が始まったのは、西暦七世紀頃(以下、年代は西暦で表す。)であるが、十三世紀末頃まではスマトラ島北西端にイスラームが浸透している。この時期にインドネシアで最初にイスラームを信仰した国家がサムドラ・パサイ王国である。十四世紀から十五世紀頃になるとマレー半島の港市でもイスラーム化が進んでいく。そして、マラッカ王国がイスラーム化すると、東南アジア島嶼部へとイスラームが急速に普及していった。

現在、東南アジアはインドネシアやマレーシアを中心に、ムスリム(イスラームを信仰する人々)が多い地域となっている。インドネシアはイスラームを国教としてはおらず、いわゆるイスラーム国家ではないが、インドネシア国内のムスリム人口は約二億人であり、これは人口のおよそ八十八パーセントにあたる。また、マレーシアではイスラームが連邦の宗教として定められている。さらに仏教国としてのイメージが強いタイ国においても、マレーシアと国境の近いタイ国南部ではマレー系のムスリムが多く、近年分離運動の拠点ともなっている。このように、東南アジアのイスラーム化の問題は現代にまで影響している。

二、サムドラ・パサイ王国 (Kerajaan Samudera-Pasai)

サムドラ・パサイ王国は、十三世紀後半から十六世紀にかけてインドネシア・スマトラ島北西端（現在のナンングロアチエー州）に位置していた港市国家である。サムドラ・パサイ王国は、インドネシアで最初にイスラームを信仰した国家といわれている。王国の本拠地ははじめはパサイ川左岸河口近くのサムドラ、後に右岸やや上流のパサイに置かれたため、サムドラ・パサイ王国といわれている。

サムドラ・パサイ王国に関する史料としては、古典マレー語で書かれた『Hikayat Raja Pasai』⁽³⁾がある。この書の中では、この地の王であったムラ・シラウがイスラームに改宗し、スルタン・マリクル・サレーと改称した。その後、メッカから遣わされた船の船長シヤリフ・シェイク・イスマイルという人物によってこの国の王族・民衆がイスラームに改宗している。そして、メッカから遣わされた船に途中から乗船した「貧者」は、船が帰国した後もサムドラの地に残りその国のイスラームの基礎を固めたと記されている。

前述の内容から、メッカから遣わされた船の船長がスーフイー（イスラーム神秘主義者）であったということは断言できないが、少なくとも「貧者」のほうはスーフイーであった可能性が高い。しかしながら現段階では、この貧者がすなわちスーフイーであると断定するにいたっていない。さらなる史料の読み込み及び他文献・史料からの検討・考察が必要である。

三、パタニ王国 (Kerajaan Patani)

パタニ王国は、十四世紀後半に成立したとされる港市国家である。王国の領域は現在のタイ国南部にあるパッターニー県、ヤラー県、ナラーティワート県を中心とした地域である。マレー系の王国で、現在もこの地域にはマレー系ムスリムが多くいる地域となっている。王国は初期にイスラーム化したのが、アユタヤ朝に朝貢関係を強いられた、パタニ王国のスルタンはしばしばアユタヤ朝に対する抵抗と服属を繰り返していた。⁽⁴⁾

パタニ王国の王国年代記は『Hikayat Patani』であり、パタニ王国の建国やイスラーム化、アユタヤ朝との関係等が記されている。それによるとパタニのイスラーム化は、まず王がイスラームに改宗し、王族や臣下の改宗につながり次第に民衆のイスラーム化が行われてパタニ王国がイスラーム王国となったのである。『Hikayat Patani』に記されているパタニ王国のイスラーム化の過程は次のようなものである。すなわち、パタニの地を治めていたファヤ・トゥ・ナクバ王が皮膚病にかかり、その治療と引き換えにイスラームに改宗するというものである。当時のパタニ王国領内には、王の皮膚病を治癒させることができる人物が存在せず、パサイ出身の人物シェイク・サイードによって治療された。しかし、王は病が治癒してもシェイク・サイードとの約束を破り、すぐにはイスラームに改宗せず、三度目にしてようやくイスラームに改宗し、スルタン・イスマ

イール・シャー・ズイルアー・フィルアラムとして即位した。

このシエイク・サイードはバサイ出身であると記され、またシエイクという名称からイスラームに帰依していたことが窺い知れることから、前述したサムドラ・バサイ王国と何らかの関係があると考えられるが、その詳細は「*Hikayat Patani*」には記されておらず推測の域を出ない。また、シエイク・サイードが行った王の皮膚病の治療に関しても詳細が記されていないため、推測の域を出ないが「誰にも治せなかつた病気を治癒させた」という記述からはスーフイーたちの行う奇跡が連想される。このことをふまえるとシエイク・サイードがスーフイーであったか、もしくはスーフイズムの影響を受けていたと考えることも可能である。

四、マラッカ王国 (Malacca/Kerajaan Melaka)

マラッカ王国は十四世紀末あるいは十五世紀初めにマレー半島に成立した港市国家である。王国はマレー半島西岸に位置し、当時の国際交易路であったマラッカ海峡に面した場所であったために交易により発展した。王国の建国者は、マジヤパヒト王国による侵攻から逃れたスマトラ島パレンバン出身の王族パラメシユワラである。

マラッカ王国で最初にイスラームに改宗した王は、パラメシユワラの跡を継いだマラッカ王国二代王ムガット・イスカンダル・シャーであったが、この時期は王族や外国人の間でイスラームが信仰され

ていただけのようである。マラッカ王国で本格的にイスラーム化が進行するのは、第五代マラッカ国王スルタン・ムザッファル・シャー(在位一四四五―五九)の治世においてである。マラッカ王国の年代記「*Sejarah Melayu*」によると、彼の治世下で統治権が強化され、イスラームを確立し王国の領土を拡大させた。このことをきっかけとして王国の名声は広まり、マラッカの港にはさまざまな地方からの商人が来航し、マラッカ王国が国際交易の中心的存在となった。王たちのイスラームへの改宗に関しての詳細は確認できていないが、ジェットダから来航した船の船員の教えに従うという点では、前述のサムドラ・バサイ王国の王の改宗と酷似していることから鑑みてスーフイズムとの関係が指摘できる。

おわりに

本稿では、サムドラ・バサイ王国、パタニ王国、マラッカ王国の王国年代記を手がかりに、それぞれの王国がイスラーム化した経緯とスーフイズムとの関係について検討した。しかし、サムドラ・バサイ王国における「貧者」がスーフイーであることや、パタニ王国で王の病気を治癒させた人物が、スーフイーあるいはスーフイズムの影響を受けていた人物ということを断定するには、明らかな史料不足に思われる。今後の課題としてまず、スーフイズムがどのような性格を持っていたのか再検討する必要があるだろう。その上で再

度、各王国の年代記を中心とした史料・文献にあたり東南アジアにおけるイスラーム化に関するスーフイズムの影響を考察する。

参考文献

邦語文献

- ・今永清二「インドネシアのイスラム」『イスラム世界と国際秩序―第九回広島大学平和科学シンポジウムの記録―』（PSSHU研究報告シリーズ）No.13 一九八五年、一九―三三。
- ・今永清二「インドネシアのイスラーム化とスーフイズム」『史滴』第六号、一九八五年、六一―七十二頁。
- ・大塚和夫〔等〕編、二〇〇二年『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
- ・末永晃、一九九二年、『インドネシア語辞典』大学書林。
- ・西村朝日太郎、一九四二年『馬來編年史研究（スチャラ・マラユ）』東亜研究所。
- ・野村亨訳注、二〇〇一年『パサイ王国物語 最古のマレー歴史文学』（東洋文庫六九〇）平凡社。
- ・桃木至朗／小川英文ほか編、二〇〇八年『東南アジアを知る事典』平凡社。

外国語文献

- tr. by A.Teeuw/D.K.Wyatt, *Hikayat Patani or The Story of Patani*, 1970, Koninklijk Instituut
- tr. by C.C.Brown, *Sejarah Melayu or Malay Annals*, 1970, Oxford

University Press.

Yusuf Abdullah Puar, *Masuknya Islame ke Indonesia*, 1981,

CVINDRADJAYA.

註

- (1) 今永清二「インドネシアのイスラム」『イスラム世界と国際秩序―第九回広島大学平和科学シンポジウムの記録―』（PSSHU研究報告シリーズ）No.13 一九八五年、二三―三三頁。
- (2) 今永清二「インドネシアのイスラーム化とスーフイズム」『史滴』第六号、一九八五年、六一頁。
- (3) 『Hikayat Raja Pasai』の翻訳者である野村亨氏によれば、『Hikayat Raja Pasai』という題名については諸説ある。詳細は野村亨訳注『パサイ王国物語』六一―八頁参照。
- (4) 『The Story of Patani』二二四―二二五頁参照。